

# フランス語教育法研究の動向について

粕谷雄一

## 1. 序

筆者がフランス語教育の現場に入ってほぼ10年になるが、奇しくもこの10年間は日本におけるフランス語教育そのものが大きく変動しはじめた時期であった。教養主義に基づいた文学書訳読中心型授業はいよいよ時代にそぐわないものとなった。黙っていても客（学生）は来るし、どんな教え方をしても納得してもらえるとこの時代は去り、各教官は新しい時代のニーズに答える教授法を必死で模索し始めた。このような状勢の変化は世界史の流れの中心に位置づけられる根源的なものとさえ考えられる。

教官はまず最初に、初級の語学の教育は独自の哲学と、理論と、熟練とを必要とする領域であり片手間にできるものではないということをはっきりと意識しなければならない。「大学の語学教員になるためには、文学研究者(あるいは言語学研究者)になる資格があれば十分であり、語学教育に必要な特別な訓練を受けていない」という状態の弊害を克服し、教員が「インストラクターの役割」「クラスという精神共同体運営の役割」を担う能力を開発することが課題なのである<sup>(1)</sup>。このような能力開発は一人の努力では明らかに限界がある。教官相互の情報交換、意志疎通が不可欠となる所以である。

そして、この領域における業績に対し、それにふさわしい評価が与えられるようになることが望ましい。

フランス語の *pédagogie* (教育法) に関わる公的な学会としては日本フランス語フランス文学会、フランス語学会、そしてフランス語教育学会——その前身は日本フランス語教授連合、日本フランス語教育研究協会である——がある。しかし1996年の時点において日本のフランス語教育法研究を特徴づけている

のは、大学の枠を越えて集結した教官たちによる自主的な活動である。次節で現在活動中の代表的なフランス語教育法研究活動グループをご紹介します<sup>(2)</sup>。

## 2. フランス語教官グループによる自主的活動

### i. 「フランス語教育を考えるつどい」

まず最初に追手門学院大学中村啓佑氏が中心となって開催されている「フランス語教育を考えるつどい」の先駆的意義を強調したい。1983年4月、中村氏と問題意識を同じくする関西の諸大学のフランス語教官によって始められたこの会は、毎回一人または数人の話題提供者が一つのテーマについて報告を行い、その後で全員がそれについてディスカッションをするという形式である<sup>(3)</sup>。年3回大阪で自主的に会合を開くという形で定着し、参加者を増加させながらフランス語教育の実地における能力開発教育の欠を補う役割を現在も果たしつづけている。また同時にあるべきフランス語教育の将来像についてのディスカッションの場も提供している。「授業と教材において、文化をどう扱うか」というテーマのもと、関西学院大学の曾我祐典氏と大阪市立大学（当時）の田辺保氏が激しい議論を戦わせた第16回（1988年12月26日）はその典型であろう<sup>(4)</sup>。

### ii. 「関西フランス語教育研究会」 *Rencontres pédagogiques du Kansai*.

フランス語の名前をとって通称「ランコントル」と呼ばれるこの会合も関西の有志が自主的に組織し、春休み中の二日間、5部屋程度を用いて90分の「アトリエ」を計30開き、各アトリエで一つのテーマについて話題提供者の報告、および討論を行う。1987年3月、神戸セミナーハウスで第一回が開かれた。特に会場を新大阪駅近くガーデンパレス・ホテルに移してからは、足の便のよさも手伝って参加者が増大し、1996年度第10回大会は百数十人の参加を見た<sup>(5)</sup>。

### iii. 「フランス語教授法研究会」 *Journée pédagogique*

首都圏で「ランコントル」と同じ1987年の11月に獨協大学の小石悟氏が世話人となり発足。獨協大学後援のもとに同大学外国語教育研究所が中心となり、

フランス語教育学会、フランス大使館との共催の形をとっている。11月の日曜日を一日使って東京のアテネ・フランセで開かれる形が定着した。

1995年の第9回には182名もの参加を集めている<sup>(6)</sup>。

#### iv. 「Pédagogieを考える会」(通称 Péka ペカ)

1989年11月～1990年2月にフランス大使館、フランス語教育学会の共催で開かれた第一回フランス語教育セミナー参加者が母体となって、セミナー終了後も定期的に集まってフランス語教育問題について話し合える場を希望したのが発足の理由である。しかし会員制をとっているわけではない。研究会が年に5、6回、毎回決まったテーマのもとに開かれていて、誰でも自由に参加できる。ペカの第一の目的は「自己啓発」である<sup>(7)</sup>。

いずれの会も、各々の教官が自らの具体的経験から生まれた問題意識とその解決法を語り合う場となっている。フランス語教育法の改良に熱心な全ての教官をわけへだてなく受け入れている。またフランス語以外の教官の参加も拒まれることはないと思う。全ての大学の語学教官諸兄が、このようなフランス語教官の活動を参考にされることを切に願うものである。

### 3. 教科書

このようなフランス語教育法改良の動きの中から、画期的な教科書がいくつか生まれてきた。以下では、現時点でフランス語のみならずドイツ語、中国語その他の教官の方々にも参考になると考えられるような「普遍的」発想を持ったテキストという視点から、筆者が9月11日の研究会の限られた時間で言及することのできた3つの教材に限ってご紹介したい。

#### i. 『フランス語86』シリーズ(現在は『フランス語21』 白水社刊)

大学における初級フランス語教育において革新的意義をもって登場したのが『フランス語86』シリーズである。教室をコミュニケーションの空間とし、そ

の中で実際のフランス語使用を通して運用能力を育てていくという姿勢が徹底している。文法も語彙も発音も基本的には学生自身が探りつかみ取っていきけるようにするため、完全主義が放棄され、学生の意欲をそぐような教官の介入が極力戒められる。

これは関西の数人のフランス語教官の共同研究から生まれた教科書である。1986年刊の『フランス語 86』に始まって、以後『フランス語 87』『フランス語 88』『フランス語 90』と年毎に改良を加え、『フランス語 21』が一応の決定版として白水社から出版されている(21はもちろん21世紀の意味)。当初は自主出版であり、筆者にとってはなつかしいその手作りの味を感じていただきたいので、『フランス語 88』の第二回授業冒頭に相当する部分を[図版1][図版2]にあげた。[図版1]が教官用ガイド、[図版2]がそのガイドに対応する箇所の学生用テキストである(マニュアルの略号:P = 教官、E = 学生、L = 教科書、C = カセット)。

このテキストは授業の主役は教官ではなく学生であり、教室は教官が自らの知識や能力を披瀝する場ではないということを主張している。教官用ガイドには、教官が語るべき最も効果的な言葉、練習にかけるべき効果的な学習時間が提案してある。一年の学習の最初に「教室で用いる表現 CONSIGNE」として「読んで下さい」「繰り返して下さい」「～はフランス語でなんと言いますか」等のフランス語をまず学習し、以後は教官も学生も、指示や質問を出来る限りフランス語でするように促されている。

日本の学生一般が持つ欠点の第一は「自分からしゃべらない」ということである。文法という知識を与えられるのを、受け身の姿勢で待っているのである。これを打破するために、教官用指導書で再三繰り返される注意書きを書いておこう。「綴り、発音、文法に関する説明いっさい不要」「和訳無用」「学生からの質問がなければ、解説不要」「発音矯正不要」... この過激な指示の陰には、なんとか学生諸君に口を開いてフランス語を発して欲しい、フランスに行ったら皆がやるように、教室でも自分で頭を働かせてフランス語を理解・修得していって欲しいという祈りのようなものが感じられるではないか<sup>(8)</sup>。

ちなみに、上で紹介した「つどい」における曾我祐典対田辺保の88年12月の対決は、田辺氏がこの『フランス語86』シリーズが「文化」を教える視点を全く欠いていると批判したことから実現したものであった。本論では語学授業における「文化」という大問題に触れる余裕はもとよりない。ここでは『フランス語21』を用いて教えることが文化を等閑視することに直結するわけではないことだけ指摘しておきたい。

ii. 『ことばのしくみ フランス語』（白水社刊）。曾我祐典著。

世にあまたあるフランス語文法書であるが、各々の文法事項の配列がどういう原理のもとになされているか理解に苦しむことが筆者には再三ある（フランス語に限らず、文法事項の配列ということに関して注目すべき研究があれば、筆者に教えて頂ければ幸いである）。この文法教科書はフランス語の文法説明を「伝えようとする内容」から「表現手段」への道筋をたどって、論理的に進めようとするところに特徴がある。

第1課では「コミュニケーションの場面」を想定して1・2人称、および3人称の概念を導入し、次に「相手に対する働きかけ」の項目で平叙文、疑問文、命令文、感嘆文の別を導入する。また「行為・事柄の表し方」とした項目で、「不定法」は行為それ自体を表すもの、「接続法」は事柄を表すもの、「直説法」は事柄の時期を示すものという形で動詞の叙法を導入する。[図版3]は、いわゆるSV型構文を「『... が～する』+しかた」という項目のもとに導入している課である。

普通の文法書では一番最後に回される動詞の接続法の概念をいきなり最初から出す（もちろん具体的活用は後の方で学習するのだが）などの過激さを難ずる人がいるのは無理もないところだが、著者の意図をよく理解するならば、文法記述において論理的一貫性を志向するということは、教室という、教育という目的のために特に外界から遮断されている空間の本質にある孤立性を、人間の社会生活と言語活動の構造的把握のために活用し、ひとつの言語が有機的統一体として学習者の中に生き続けられるようなものとして定着するのを願うこ

とに他ならないことが分かる。

ちなみに、お気づきの方も多と思われるが曾我氏の発想はフランス語の枠内にとどまるものではなく「語際的な」射程を持っている。現に曾我氏は1996年11月現在『使える朝鮮語』（白水社）を準備中であり、本紀要が発行される頃にはおそらく公刊されているはずである。

iii. 『アンサンブル』（芸林書房刊）。ロラン・スレット Roland Celette 著。

初級の一番最初、学生たちがフランス語をまだほとんど知らない段階でどのように授業を活性化するか、いつも頭を悩ませるところである。また文法が少し進むと練習問題がやたら難しくなって授業の進み方が重たくなるというのもよく感じることである。この本はそういう教室での作業のアイデアを提供してくれる教材である。例を〔図版4〕にあげる。

図版に示したのは文法項目としては「否定」を扱った章の一部である。特にEx.48に注目して頂きたい。練習問題というのは往々にして、著者が一生懸命作っても学生が一回解けばそれ以上は使えない、言うなれば「使い捨て」のものになっている。問題文に登場する単語の意味を調べる作業の繁雑さから（もちろん語彙を増やすことが必要なのは当然だが）、文法事項の修得という目的がぼやけることも多い。『アンサンブル』の多くの練習問題は「ひとつで何回でも使える」のである。さらに、一問解くために頭を数段階働かせることが要求される。「書く」という、必要ではあるが鈍重である過程を捨象して、学び手に文法を機能させる目的のために全神経が集中し、ゲーム・クイズ感覚の導入が学び手の興味を持続させる。

著者のスレット氏は現在トゥーロン大学で教鞭を執っておられるが、大阪大学、東北大学、九州芸術工科大学等日本各地で長年フランス語教員をつとめられ、またフランス大使館言語担当官、東北日仏学院長、アリアンスフランセーズ日本代表等を歴任、日本全体のフランス語レベルの向上に尽力された、われわれの恩人である。『アンサンブル』は、フランスの超エリート校 *Ecole normale* 出の秀才が日本の大学一年生にいかにかフランス語を教えるかという命題

に情熱を燃やすとこういうものが出来るのか、という感慨に打たれる本である。

その他、『モザイク』(大阪日仏文化センター編)、『旅で入門フランス語』(中村・竹田・ビルマン著、大修館書店)、『ホームステイのフランス語』(阿南婦美代著、白水社)等々、ご紹介したい教科書はたくさんあるのだが割愛せざるをえない。著者の方々にはお許しを願いたい。改めてご紹介できる機会が得られれば幸いである。

#### 4. どこに素材を求めるか

語学教材は、もちろん教科書だけではない。現代社会の持っているさまざまなメディアを活用して語学教育にバラエティを与えることは、今では不可欠なことと言ふべきである。以下、活用できる語学教育素材をいくつか(もちろん網羅的ではない)あげて、それぞれの特徴について私見を述べた。各領域にはそれぞれ詳しい先生がおられるので個人名をあげた方が解説は分かりやすく具体的になるのだが、この先生に言及してあの先生には言及しないという不公平を避けるため、筆者自身の考え以外はおおむね一般的な記述にとどめることにした。諸兄のご寛恕をお願いしたい。詳しくは『関西フランス語教育研究会報』『*Etudes didactiques du FLE au Japon*』(PEKA 報告)『Journée pédagogique 報告』そして『フランス語教育を考えるつどい』記録、『フランス語教育』等の実践具体例の説明を参照していただきたい。

##### i. シャンソンの利用。

原語の歌を語学教材として活用する教官は多く、フランス語教育でもさまざまな活用例が報告されている。筆者は、教育目的で音楽を用いるというだけでは十分でなく、良い音楽を用いることが重要なのだと考える。いくら文法事項の説明に好都合の曲、演奏があっても、それが学生の感性に合わないようなものであっては効果は期待できないように思う。

また学生の感性に合う音楽といっても流行歌はすたれるもので、せっかく労

力を注いで教材を作っても一、二年もしたら使う気がしなくなるというのでは経済的でない。そのため筆者は『アヴィニヨンの橋の上で』とか『クラリネットを壊しちゃった』などフランスに昔からある歌に現代的アレンジを施したCD、*50 Chansons et Comptines de France* (『フランスの50の歌と数え歌』) 第一集、第二集(UNIDISC, ENFANT/AUVIDIS U 316129 と同 U 316149)を継続して用いるようになった。初級フランス語の第一時間目から使えるような簡単な曲や、現代日本で新譜として売り出したらヒットするのではないかと思えるような演奏も入っている。

## ii. フランス映画の利用。

フランス映画のシナリオをテキストとして、画像と合わせながら授業を進めていくというのは、やってみると案外難しいものである。筆者も、従来の訳読方式とさして変わらないような授業になってしまった経験がある。ともかく、いくつものフランス映画のシナリオが教科書として市販されており、現在では単なるシナリオにプラスして授業の段取りやグループ作業のやり方まで指導する教材が出版されてきている。

基本的に筆者は、ある映画の全編を授業で扱うというようなことは出来ないと考える。言語教育上有益な特定のシーン、シーケンス、および映画そのものへの興味、「この後どうなるのだろう」という気持ち、「続きを見たいくなる」気持ちを起こさせる箇所を厳選して用いるべきだと思う。

## iii. ラジオ・テレビニュースの利用。

ラジオではRadio France Internationale のニュースを利用することができ、また現地のニュースを録音して一月ごとにまとめて転写テキストを付けたものがずいぶん前から市販されている<sup>(9)</sup>。

テレビ・ニュースでは、衛星放送の France 2 フランス語ニュースを利用するのが一般的になっており筆者もときどき使用するが、教材として使えるニュースを選び出し、フランス語のテキストに起こし、ネイティブ・チェックを受け、さらにそれを教材として自分の受け持ちの学生のレベルに合わせた使



い方を考えるというのは、相当大変な作業になるというのが問題である。シャソンのところで流行歌の扱いについて述べた通り、ニュースもすぐ古びてしまうものが多いこともネックである。

現在では興味深いニュースをピックアップしてフランス語テキストをつけたビデオ教材が市販されているから、財政的余裕があればこれを利用するというのもよいだろう<sup>(10)</sup>。

あるいは授業の朝に放送されたニュースをそのまま教室に持ち込み、学生に聞き取れるいくつかの単語を手がかりにそのニュースの概要を理解させるという使い方もある。

#### iv. コンピュータの利用。CALL システム。インターネット。

大学の授業におけるコンピュータ利用となると、個々の教官の創意のレベルを越える話になることが避けられない。CD-ROM 教材やコンピュータ利用の教育法あれこれについてはそれぞれ実践報告を参照して頂きたい。

現在全国的にCALL (Computer Assisted Language Learning) システムの導入が盛んでありこれに関係したWeb サイト、メーリングリストも数多いが、ここでは広島大学で導入して成果をあげている実例報告が公開されているサイトのURL をご紹介しておきたい：

<http://www.ipc.hiroshima-u.ac.jp/~langlabo/JAVE.html> である。

さて現在話題のインターネットについては、これを利用してどんな教材・授業が考えうるか、まだ未知数のところがある。フランスの新聞の最新版の入手に関しては、1996年11月時点では全紙面を無料公開している *La Dernière Nouvelle d'Alsace* というアルザス地方紙が有名である。サイトは：  
<http://www.sdv.fr/dna/>である。

フランスのラジオの最新ニュースもインターネットで聞くことが出来る。France Info というニュース専門局の放送が Realaudio という Plug-in を使って聞くことが出来るようになっている。こういうのを見せられる（聞かされる？）と、ついに時代もここまで来たかという感に打たれる。サイトは：  
<http://www.radio-france.fr/france-info/chron.htm> である。

しかしインターネット利用は今後、フランスの学校との交流などの方面にこそ威力を発揮していくものと思われる。フランスは以前からミニテル Minitel という独自のネットワークを発達させていたので、これを利用して既に 1992 年に「Cipango またはコロンブス第 5 の旅」という試みが行われている。フランス、日本、イタリア、アメリカ合衆国、コスタリカの十数校から約 100 名の学生がネットワーク上でフランス語を用いて国際交流授業を行うというものである。日本からは長崎外国語短期大学、甲南女子大学、関西学院大学、カリタス女子中学高等学校が参加した<sup>(11)</sup>。

マルチメディアに関しては、現在進歩は文字どおり日進月歩であり、この紀要が刊行されるころには、これを書いている時点(1996年11月)にはなかった動きが起こっていることであろう。きちんとした本に入っている情報は既に古いことも多いので、面倒でもコンピュータ雑誌にまめに目を通し、ときにはネットサーフもし、詳しい人との情報交換を常に心掛けるしかない。コンピュータを理解するための勉強に費やさねばならない労力・時間については筆者も、なんでこんなことしていなきゃいけないのかとしばしば癩癩も起こしたくなるのであるが、今後良質な語学教育を学生諸君に提供するためにはコンピュータが欠かせない道具であるのも事実である。

「メーリング・リスト」(ML)に参加することは、この目的のために実に有益である。これは、各々のメンバーがホスト・コンピュータに電子メールを出すとそれがインターネットを通じて世界に散らばる全メンバーに配信されるというシステムのことで、これを活用すれば、誰に尋ねればいいのか分からない疑問に適任者から答えを得ることができ、自分ひとりの持っていた情報を、それを必要とする人に伝えることができる。MLに参加すると、知識の伝播が猛烈な勢いで加速されるのが実感できる。現時点で日本のフランス語関係者には Frenchling 他の活発なMLがある。

#### v. 文部省認定実用フランス語技能検定試験(仏検)問題の活用。

大学の授業の中に仏検および仏検問題を位置づけるという考え方がある。

民間に高度なフランス語を学べる場のない地方、手本になる大学院生がいな

い大学のフランス語学生においては、もう少し頑張れば相当のレベルに達すると思われる学生も往々にして「欲がなく」勉強に頭を向けない。自分がどの程度できるのか、どの程度努力してどの程度のレベルを目指すのが現実的なのが判断しにくいのである。そこで全国的規模での客観基準として、また比較的簡単に受験できるものとして仏検の存在が注目できる。これを授業に組み込んで、学生の目標設定を容易にし、向上心を促進する方針をたてることができるのである。

弘前大学では仏検利用のため特別なカリキュラムまで組んでいる。その実践をそのまま他大学で応用するのは困難であろうが、その精神を参考にするのは有益なことと思われる。

## 5. おわりに

筆者が語学教育の世界に入る前に予感していたことだが、フランス語、ドイツ語などの第二外国語修得の努力は社会的、経済的な意味ではなかなか報われないものになりつつある。しかしこのことは外国語教育の無効を宣告するのではなくその体質を変える必要を指し示しているのであり、特に「教室空間をどう利用するか」<sup>(12)</sup>に関してラジカルな見直し、考え直しが求められているのだと筆者は考えたい。

先日某ラジオ局で「あなたが、やっておけばよかったと思うことは何か」というアンケートの答えの筆頭が「勉強と語学」であったというのを耳にした。筆者の実感では、この「語学」とは英語だけではないと思う。「大学の外には」フランス語などの第二外国語の能力向上の欲求、教育の需要が実際にあるのである。問題はその需要を学生の大学在学中に掘り起こすことである。

またテクノロジーの発達が一見「人間」の活躍する余地を日に日に狭めている印象を受けることに関してどう考えるかについては、少し思考実験をしてみるとよい。CALL がさらに発展を遂げ、語学教育のための至れり尽くせりの——インターアクティブなものも含んだ——完璧なコンピュータシステムが完成したとする。そのあかつきには学生にその教材を与えておけば教官は要らな

い、教壇にはバケツでも置いておけばいいということになるだろうか。なりはしない、と断言できるためには「教え」が「自習」とは異なるのでなければならぬ。その差異化のためには、教官が「人間」であるということを生かす、学生が「人間」であるということの意味を生かす、このことをおいて他にはない。

1997年時点の日本において、Max Picard が望むような「具体的に授業をはじめ以前にすでにその人から教えが発散する一人のひと」になることが教官に要求されているとは筆者には思えない。しかしこれとは別の意味で、「肉体的」あるいは「人間（であること）性」と呼ぶべきものが教えの場に機能的要素として働くことが前提となっているような議論がこれからますます必要になっていくはずと考えるのである。

## [注]

本論は筆者が金沢大学外国語教育研究センター第6回研究会（1996年9月11日）でお話した内容をまとめたものです。内容は基本的に当日の限られた時間で言及できた範囲にとどまっております。遺漏の多いことをお詫びし、読者諸兄のご寛恕をお願いしたく思います。

(1) 中村啓佑「いま大学では」『大学と教育』第七号、東海高等教育研究所、1993年。

(2) 中村啓佑氏はこれまでのフランス語教育法研究の諸活動を総括した労作『フランス語をどのように教えるか』（長谷川富子氏と共著、駿河台出版社）を1995年に上梓された。この本に非常に完備した書誌が載せられており、ぜひともそちらを参照されるようお勧めしたい。

「フランス語教育を考えるつどい」、「関西フランス語教育研究会」、「Journée pédagogique」、「ペカ」、「フランス語教育学会」の発表題目も1994年分まで網羅されている。

(3) 参考までに前掲書掲載分以降、最近2年間のテーマをあげておく。

● 1994年12月22日 テーマ「フランス語の授業と聞く力」

阿南婦美代：フランス語入門・初級レベルにおける聞き取りの指導

中井珠子：フランス語を聞く

宮下明信：フランス語の聞き取りにおける問題点

● 1995年7月28日 テーマ「お知恵を拝借／知恵を貸します」

パネリスト：伊勢晃、川口陽子、阪口勝弘、傳田久仁子、藤田義孝。進行：高岡優希

● 1995年12月25日 テーマ「映画の利用」

大木充：『海辺のポーリーヌ』から『仕立屋の恋』まで

川合ジョルジェット：Cinéma et activités pédagogiques.

高岡厚子：映画を通して見るフランス文化

● 1996年4月27日 テーマ「わたしのLeçon 0 ——初期の授業をどう生かすか——」

北村卓：フランス語学習の5W1H ——問いかける姿勢を望む——

中村公子：私のLeçon 0

鶴沢恵子：Leçon 0

高岡優希：Leçon 0 の授業——参加意識という観点から——

(4) 「つどい」は刊行物は出版していないが、全会合の個々の発言の要約が記録として残されていて、これが実に貴重な資料となっている。ご覧になりたい方は中村氏に直接申し出て下さい。

(5) 各アトリエの要約が『関西フランス語教育研究会報』として毎年刊行されている。ご覧になりたい方は筆者までお申し出下さい。

(6) 各アトリエの報告が『Journée pédagogique 報告』として毎年刊行されている。

(7) 『Etudes didactiques du FLE au Japon』(PEKA 報告) が毎年刊行されている。

(8) なおこの場を借りて、『フランス語21』の著者のひとりでフランス語教育法研究界の中心人物であり、惜しくも阪神大震災の犠牲となった中川努氏のことについて一言述べさせて頂きたい。

彼はフランス語能力はもとより知識、見識、独創性、行動力、指導力、いずれも群を抜いた存在だった。フランス語の世界に彼のような人物がいることに筆者はひそかに誇りを覚えていたものである。筆者が自らの教育観をまとめあげ、彼と語り合う前にその機会が永遠に失われてしまったことは痛恨である。気さくな人柄で若手中堅教員全体の兄貴分のような存在であった。現在彼の代わりとなれる人はおらず、将来再び彼のような人が得られるかどうか分からない。

ここに改めて彼の冥福を祈りたい。また読者諸兄には是非 PEKA の報告 *Etudes didactiques du FLE au Japon* 第5号所収の追悼文集をご覧になっていただきたい。

ちなみに彼の声は、今もわれわれは授業のたびに聞くことができる。『フランス語21』付属テープの日本語部分の洪い声が、彼である。

(9) 『L'Echo de la France』、飛鳥洞刊。1996年11月現在、一月分3,600円。

(10) 『フランス-TV マガジン』、早美出版社刊。1996年11月現在、一月分7,000円。ビデオ、フランス語転写と、一月遅れで日本語訳が送られてくる。

(11) 詳細は阿南・柏岡・Kawai・中川・戸口・山崎「コロンブス第5の旅——ミニテルを使った国際交流授業」『フランス語教育』第21号(1993) p.49-69を参照。思い起こせば、中川さんはこのCipangoの企画も手がけていた。

(12) 第19回「つどい」のテーマである。

## 1-2 名前と住んでいる所を言う, たずねる

(10-11)

- Ex.1 「教室で用いる表現」が口をつけて出るよう、音読させる。  
 (10') ◇p.6の“教室で用いる表現 CONSIGNE II” (または、Pが必要と判断する表現)を読み、あとについて音読させる。  
 ☐ !綴り、発音、文法に関する説明は不要。  
 ◇「今後Eは授業中に随時p.6を見ることが出来るのだから、すべての表現をすぐに覚えこもうとする必要はない」ことを伝える。
- Ex.2 前回の授業で学んだことを思い出させるための復習練習。  
 (5') ◇Cを2回聞かせる。  
 ☐ ◇Je m'appelle... と自分の名前を言い、  
 適当なEを相手に Et vous? Vous vous appelez comment? とたずね、  
 Je m'appelle... という答えを引き出す。  
 ◇他のEとも同じことをする。  
 ◇Eに教室内を自由に歩き回らせ、互いに自己紹介させる。  
 !教室の都合でこれができない場合は、近くのE同士で行なわせる。
- Ex.3 自分の住んでいるところを言わせ、相手の住んでいるところをたずねさせる  
 (10') ◇Cを3回聞かせた後、テキストのやりとりをPが口頭で言い、クラス全体に復唱させる。!(1文ずつ3回)  
 ☐ ◇適当なEを相手として  
 J'habite à... (Pの住んでいるところ)。Et vous? Vous habitez où?  
 とたずねる。!答えられない場合は他のEを相手に同じことを行なう。  
 ◇次に、Vous habitez à...? (Eが住んでいるはずのないところ) とたずねて、Non, je n'habite pas à...と答えさせるようにする。  
 ◇教室内を歩き回らせて(できない場合は近くのE同士で)練習させる。

## I-2 名前と住んでいる所を言う，たずねる

Ex.1 「教室で用いる表現」が口をついて出るようにする。

(p.6 “教室で用いる表現 consigne II”)

Ex.2 自分・相手の名前を言ったりたずねたりする。



- Bonjour.
- Bonjour. Je m'appelle Kenji Yamada. Et vous? Vous vous appelez comment?
- Je m'appelle Marie Dubois.

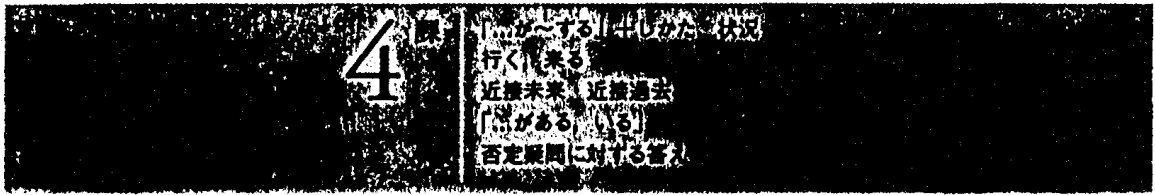
Ex.3 カセットを聞いて練習しなさい。



- J'habite à Kobe. Et vous? Vous habitez à Kobe?
- Oui, j'habite à Kobe.



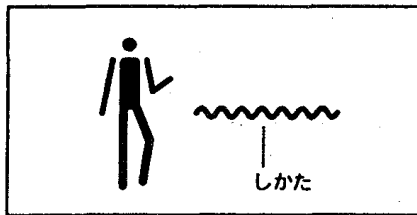
- J'habite à Kyoto. Et vous? Vous habitez à Kyoto?
- Non, je n'habite pas à Kyoto. J'habite à Otsu.



「...が～する」+しかた ▶

〈主語+動詞+しかた補語〉

■ 「...が～する」という事柄は、〈主語+動詞〉というしくみの文で表す。行為のしかた（どのように）は、動詞のあとに副詞や〈前置詞+名詞グループ〉を添えて表す（→ p.12）



▶ 主語+動詞+しかた補語

Ex.1 「眠る」を表す *dormir* の現在形を言いなさい。次に、「出発する、(ある場所から)いなくなる」を表す *partir* の活用表を完成させなさい。それから、1-5の空白部に( )内の動詞の現在形を入れて文を完成させなさい。

*dormir*

je dors
tu dors
il dort
nous dormons
vous dormez
ils dorment

*partir*

je pars
tu par
il par
nous partons
vous par
ils par

1. 赤ん坊はぐっすり眠っている
2. 車で出発するのですか
3. 私たちははしでものを食べます
4. 彼らの娘は熱心に勉強している
5. 両親はじょうずに歌うが、私は歌うのがへただ

- Le bébé \_\_\_\_\_ profondément. (*dormir*)  
 Vous \_\_\_\_\_ en voiture? (*partir*)  
 Nous \_\_\_\_\_ avec des baguettes. (*manger*)  
 Leur fille \_\_\_\_\_ avec ardeur. (*travailler*<sup>1</sup>)  
 Mes parents \_\_\_\_\_ bien mais je chante mal. (*chanter*)

1 *travailler*は-er動詞で、活用は*chanter*, *aimer*と同じ型。



Ex.48 国籍、職業などについて彼は～でないとフランス語の否定形で説明し、(国籍：彼は～でない、職業：彼は～でない、年齢：彼は～歳ではない、など) 友達に彼が誰であるのか当てさせましょう。



国籍	職業	年齢	住所	勤務地	名前
français	médecin	45 ans	Yokohama	Kawasaki	Jean
chinois	journaliste	32 ans	Tokyo	Tokyo	Son
mexicain	étudiant	19 ans	Sendai	Sendai	Paolo
italien	acteur	25 ans	Kamakura	Yokohama	Pino
japonais	pianiste	22 ans	Kokura	Fukuoka	Naoki
américain	guitariste	23 ans	Ashiya	Osaka	Mike
belge	professeur	31 ans	Nara	Kyoto	Philippe

Ex.49 次の語のグループには仲間はずれがあります。どれですか。



italienne  
américaine  
chinoise  
français  
japonaise

dentiste  
pianiste  
français  
journaliste  
acteur

2

chantes  
habites  
téléphones  
dances  
as  
est

3

je  
4  
elle  
une

Ex.50 下の表には単語がかくれています。例(棒線部)にならってできるだけたくさん探し出しましょう。



K	L	A	O	U	X	J	E	O	D	E
C	I	N	Q	N	T	A	D	I	L	S
K	X	G	U	E	R	P	E	L	L	E
T	E	L	E	P	H	O	N	E	S	D
R	Z	A	K	A	A	N	T	N	E	A
O	D	I	X	R	B	C	I	O	V	N
I	E	S	T	I	I	T	S	U	O	S
S	U	I	S	S	T	U	T	S	U	E
A	X	A	O	I	E	T	E	T	S	S

